

看護師を志す大学生が小児専門病院に関する講義で 興味を持った内容

福永 知久

要 旨

本研究は、看護師を志す大学生を対象とした小児専門病院に関する講義終了時、興味を持った内容と自身の考えについて自由記述を求め、計量テキスト分析にて出現単語数の頻度を集計し、共起ネットワーク分析を行った調査研究である。講義で学生が興味を持った内容は、初めて学んだという意見が多かった「看護が必要な子どもを持つ家族への支援」、大切さや重要性について考えさせられた「子どもの権利」、自身の経験との結びつきから印象に残った「子どもの頑張りを引き出す工夫」であった。

キーワード：小児専門病院、看護、大学生、計量テキスト分析、共起ネットワーク分析

I. はじめに

少子化は日本の抱える大きな問題の一つとなっている。子どもたちを健全に育てることが社会の将来を考える際の大きな課題となっているため、小児・周産期医療の充実が求められている。その中でも特に小児専門病院（こども病院）は、新生児から中学校卒業程度までの小児を対象に診療を行い、子どもたちを医療と保健の面から支える小児医療の中心的役割を果たしている。具体的には、一般医療機関での対応が困難な子どもや、専門的な医療を要する疾患を持つ子どもの診断・治療、予防相談、指導等が行われている。また、医療的ケア児などの在宅医療や成人への移行期医療等の多岐にわたる課題にも取り組み、病院内だけではなく、福祉施設、学校、自治体などの行政機関と力を合わせて、多職種がチームを作り活動している。そのチームの一員を担っている専門職として看護師がいることは周知の事実である。

小児看護に携わる看護師の責務は、子どもの権利を有する一人の人として子どもを尊重し、さまざまな健康レベルの子どもが社会の中で健やかに発達し生きていくことができるように、子どもとその家族に看護を提供していくことである¹⁾。そのため、子どもと家族をとりまく多くの課題や、代表的な疾患と症状、健康問題からみた看護、コミュニケーションを含む看護技術など、より実践的な学習が求められている。

一方、看護系大学や専門学校等では、社会的要請に応じた教育が行われているが、講師の専門性や教授

方法の差異といった背景を鑑みると、現代の現場が求める実践的な知識技術との間にギャップが生じている可能性は否定できない。例えば、研究を主としている講師や現場を離れて久しい講師が、特別な取り組みなく現代の現場が必要とする実践的な学習を生徒に提供することは難しいと考えられる。日本における小児看護に関する研究を概観すると、学生が実践的な学びを獲得しているかどうかを把握する研究は少なく、実践的な知識技術に繋がるような学びが達成されているのかは十分に明らかにされていない。

今回、普段から小児看護の役割を担っている小児専門病院の看護師が、看護系大学の講義時間を活用し、先述した小児専門病院の特徴に触れつつ、小児看護に必要な知識技術を効果的に習得できるように講義を行った。そこで、小児看護における実践的な学習が蓄積されているのかを確認するため、聴講した学生がどのような学びや影響を受けているのかを抽出するとともに、小児専門病院への興味の特徴について調査した。

II. 研究方法

1. 研究対象およびデータ収集方法

A 大学では、2 年次後期から 3 年次前期にかけて、講義、演習、実習を組み合わせた小児看護実践能力の向上を図る専門教育科目として合計 4 単位が設定され、それを経て 3 年次後期の小児看護臨地実習 2 単位へ臨んでいく。今回、臨地実習直前となる小児看護を学ぶ 4 単位の終盤に、小児専門病院の看護師にて「小児専門病院の特徴と看護」（講義項目を表 1 に示す）と題した講義が実施された。なお、本講義は COVID-19 感染拡大防止として Microsoft Teams を

用いた同時双方向型オンライン（1コマ90分間）にて実施された。

看護系A大学に通う女子学生55名を対象として、上記の講義終了後「講義の中で特に興味を持った内容（複数可）」と、講義後の自分自身の考えを述べてください」という質問を実施し、自由記述にて回答を得た。データ収集は、Moodle3.5(eラーニングプラットフォーム)のフィードバック機能を活用し、2020年7月に行った。

表1.「小児専門病院の特徴と看護」講義項目

小児専門病院（こども病院）の概要
子どもと家族の入院治療
小児疾患
感染症と隔離
外来処置室の子ども向けアメニティ
子どものやる気や自信を引き出す支援
プレパレーション
ディストラクション
地域における役割
多職種連携
医療的ケア児
レスパイトケア
病児保育
離島ボランティア診療
小児保健業務
予防接種
乳幼児健診
子どもの健康教育
子どもの権利
小児看護技術
小児医療の環境
遊び、保育
医療安全管理
家族の支援
きょうだい児の支援
ホームケアリーフレット
在宅移行支援と在宅生活の実例 など

2. データ分析方法

形態素解析は、茶筌（日本語自然言語処理システム；奈良先端科学技術大学院大学松本研究室）を用いて行った。テキストマイニングはKH Coder ver3.0を用い、計量テキスト分析にて出現単語数の頻度を集計した後、共起ネットワーク分析を行った。集計単位は文とし、語の取捨選択に関しては最小出現数を20に設定した。描画する共起関係の絞込みにおいては描画数を60に設定した。共起関係の強弱を線分の太さで、語の出現数を円の面積として描画した。さらに、共起関係の媒介性によるサブグラフ検出によりクラスタリングを行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、ヘルシンキ宣言を尊重し、研究協力者

の人権および利益の保護に配慮した研究計画を立てて実施した。研究実施にあたっては、研究協力者に研究の目的、方法および発表について説明した。また、匿名にてデータを取り扱うこと、研究協力の可否は今後の生活や評価には一切影響がないことも説明したうえで、研究協力の同意を得た。

Ⅲ. 研究結果

解析に用いたテキストデータは、研究協力への同意が得られた54件とした。

1) 計量テキスト分析

「講義の中で特に興味を持った内容および自身の考え」について、どのような語によって語られているのかを評価するために、出現単語数の頻度集計を行い、頻度上位25単語を表2に示した。講義内容に直接関与する単語である「子ども」が最も多く出現した（492回）。人物・施設に関する単語として、「家族」、「病院」、「子どもたち」、「親」、「看護師」、「こども病院（小児専門病院）」が抽出された。

医療に関する単語では、「入院」、「看護」、「治療」、「医療」が抽出された。学生側の感想を表現する単語として、「思う」、「感じる」、「行う」、「大切」、「考える」、「学ぶ」、「知る」、「必要」、「講義」、「持つ」が抽出された。また、今回の講義内容を表現する語句として「工

表2. 単語出現頻度の集計（上位25位）

抽出後	頻度（回数）
子ども	492
思う	242
工夫	161
家族	150
感じる	147
行う	140
病院	121
大切	109
子どもたち	104
入院	88
考える	86
学ぶ	85
看護	77
治療	73
親	67
看護師	65
こども病院	63
医療	61
知る	61
必要	61
権利	59
支援	59
講義	56
持つ	56
子育て	55

2) 共起ネットワーク分析

共起ネットワーク分析

「子ども」を中心とした出現頻度の高い語句で構成される中心性の高いグループが抽出され、中心集団に共起する4つのグループを確認した。第1グループとして「家族」、「入院」、「行う」という単語からつながるグループが抽出された(図1内右上)。グループには「支援」、「子育て」、「兄弟」、「在宅」、「レスパイト」といった単語が含まれ、具体的には表3に代表されるような文章群が該当した。また、「看護が必要な子どもを持つ家族への支援」に関する内容が抽出された。

- ・レスパイト入院や、患児とその家族がより生活しやすくなる情報をリーフレットなどを活用しながら、随時提供していくことも看護時の重要な役割。
- ・看護師は兄弟児の精神的のケアも行う必要があることを学んだ。
- ・病院から在宅に移られた子どもとその家族の支援も看護者の大きな役割である。
- ・病院は、診察や入院など病院に訪れたこどもを対象にするものだとおもっていたため、機能のなかに在宅支援がふくまれていることに驚いた。
- ・今回、レスパイトという言葉をはじめて聞き、疑問に思ったため調べてみた。



第2グループとして、表4に代表されるような文章群から図1内右下に、中心集団より「大切」という単語からつながるグループが抽出された。グループには「権利」、「守る」、「受ける」、「説明」といった単語が含まれ、「子どもの権利」に関する内容が大部分を占めた。

表4. 抽出文例（第2グループ）

- ・子どもがわかるように説明することや、意思を表明し自由に表現することが子どもの権利を守るために必要なことの一つ。
- ・子どもたちは、成長発達の途中にあるので、入院していても教育を受ける権利を持っている。
- ・子どもの持っている権利を侵害することのないような関わりをすることが大切だ。

第3グループとして、表5に代表されるような文章群から図1内下部に、中心集団より「工夫」という単語からつながるグループが抽出された。グループには「頑張り」、「引き出す」、「援助」、「スプーン」、「飲む」といった単語が含まれ、「子どもの頑張りを引き出す工夫」に関する内容が確認できた。

表5. 抽出文例（第3グループ）

- ・不安を感じさせないための工夫として、治療室にアンパンマンがたくさん貼ってあったり、アンパンマンのDVDを流したりと子どもが興味をひくものを目のつくところに配置してあった。
- ・頑張りを引き出すために薬を飲んだらシールを貼っていくようにしたり、薬を飲むスプーンをキャラクターものにしたり、その薬の苦みを抑える飲み方の工夫をしたりしていた。
- ・病院内のアメニティの工夫が印象的だった。

最後に、図1左部に、中心集団より「講義」、「学ぶ」という単語からつながる第4グループが抽出された。グループには「今回」、「興味」、「持つ」、「見る」といった単語がグループ分けされ、受講した学生の「感想」に関する内容が抽出された。

IV. 考 察

本研究における調査により、今回の小児専門病院の看護師の講義で学生が興味を持った内容は「看護が必要な子どもを持つ家族への支援」、「子どもの権利」、「子どもの頑張りを引き出す工夫」の3つに分類された。これらのテーマは、講義中に取り上げられた内容である。

それぞれ講義の中間、講義の後半、講義の前半で取り上げた内容であったことから、学生が本講義に対し、ある特定の講義内容にのみ興味を示している

のではなく、講義全体を通して満遍なく興味を持ち、学習を行っていると考えられる。

今回のテキスト解析において「初めて」という単語は、頻度が少なかったため、共起ネットワーク中には現れなかったが、「レスパイト」という単語と併記される頻度が高かった。近年、レスパイトは、小児医療の分野で非常に重要な課題として注目されており^{2,3)}、今回の解析から学生も興味を持ちやすい分野であることが示唆された。

また、「大切」、「重要」という単語との併記が多い講義内容は「子どもの権利」であった。子どもの権利についても、レスパイトと同様に、小児看護・医療の分野で非常に重要な課題として取り上げられている^{4,5)}。以上の点から、実社会側が重要視している項目と学生の興味は合致していることがわかった。

一方で、既存のA大学小児看護学4単位において、レスパイトについて十分な学習時間を割くことができておらず、近年の動向を反映しているとは言い難い結果となった。最新の実務動向について、今後積極的に学習の機会を増やしていくことが重要であることが示唆された。

また、講義内容の中で「工夫」は頻度が非常に高く、また該当部の文章量が多い傾向が認められ、受講した学生にとって印象強い内容であったことが示唆された。工夫の内容として頻度が高かった内容が2つあり、1つは薬を飲む際のスプーン使用の工夫が取り上げられた。もう1つは、部屋にキャラクターの写真を貼るという工夫が取り上げられた。

「工夫」に関する記載が多かった理由の1つは、「小児科に予防接種を受けに行ったとき、キャラクターのシールをもらえることは、病院に行くときの私の一つの楽しみになっていた」等のように、学生自身にとっての経験・記憶と結びつく内容であり、講義内容の中でも自身が将来的に取り組んでいる映像が浮かびやすい内容であったことが影響していると考えられる。

また、「薬を飲む際のスプーン使用の工夫」について出現頻度が高かったことから、学生の学びが実務に傾いており、実態を学べる機会が限定的である可能性が示唆された。授業で取り扱うケーススタディなどでは見えない部分への関心が窺える。

研究の限界として、今回の解析では、学生の「講義を受けての自分自身の考え」については、「学んだ」「考えた」「興味を持った」「印象に残った」という汎用的な文章のみが抽出され、特徴の抽出はできなかった。今後、学生の「考え」の抽出を目指す場合には、個別の設定問を用意する必要がある。

V. 結 論

今回の講義で学生が興味を持った内容は、初めて本講義で学んだという意見が多かった「看護が必要な子どもを持つ家族への支援」、大切さや重要性について考えさせられた「子どもの権利」、自身の経験との結びつきから印象に残った「子どもの頑張りを引き出す工夫」の3つであった。また、社会的要請と学生の興味は概ね合致しているが、実態を学ぶ機会が少ない可能性がある。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力を賜りました皆様並びに執筆にあたり助言を頂きました社会医療法人 人天会 鹿児島こども病院 看護部長 梶野恵美子氏に、心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 中野綾美：ナーシング・グラフィカ小児看護学① 小児の発達と看護. 第6版, メディカ出版, 大阪, 2019
- 2) 金野大：医療的ケア児に対するレスパイトを目的とした訪問看護の検討. Core Ethics 13: 49-60, 2017
- 3) 酒井結実：重症心身障がい児の定期的レスパイト入院中に行う在宅ケアの調整に向けた看護師のかかわり. 日本小児看護学会誌 26 : 65-71, 2017
- 4) 高橋衣：小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス. 日本小児看護学会誌 25 : 8-15, 2016
- 5) 橘則子：小児看護実習で看護学生が学んだ子どもの権利を尊重したかかわりについて. 福岡県立大学看護学研究紀要 8 : 19-25, 2011

The lecture topics on children's hospitals that interested university students aspiring to become nurses

Tomohisa Fukunaga

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words: children's hospitals, nursing care, university students, quantitative text analysis, co-occurrence network analysis

Abstract

University students aspiring to become nurses were surveyed after they attended a lecture on children's hospitals. The students provided free responses on the topics that interested them and communicated their thoughts on those topics. The frequency of the terms that appeared was calculated by quantitative text analysis, and a co-occurrence network analysis was subsequently performed. The characteristics of the lecture topics that nursing students were interested in included "support for the families of children who need nursing care," which was something many students learned for the first time, "children's rights," which made them think about their significance and importance, and "ingenuity to encourage children's efforts and resilience," which left an impression on them since they associated it with their own experiences.
